



従容録に学ぶ (五三)

第二六則 仰山指雪

〔示衆〕

衆に示して云く、氷霜は色を一じにし、雪月は光りを交わう。法身を凍殺し漁父すら清損わん。還た覺玩に堪ゆるや？

〔本則〕

挙ぐ、仰山、雪師子を指して云く、「還た此の色に過ぎ得るものありや？」（仰山、覺わず平地に喫交く。）雲門云く、「当時は便ち与な推到さん。」（舡をいかんともせず、辱斗を打破さば。）雪竇云く、「只だ推倒を解すれど、扶起を解せじ。」（路にて不平を見、劍を抜いて相い助く。）

〔頌〕

一倒一起雪庭の師子、（恰も箇の活底の似し。）犯すを慎して仁を懷き、（法を識る者は恐る。）為すに

勇んで義を見る。（路にて不平を見る。）清光、眼を照らすは家に迷うが似し。（東西を弁えず。）明白より身を転ずれば、還つて位に墮ちいる。（更に一層樓に上る。）衲僧家は了く寄ることなし。（且く一生を過ぐべし。）同死同生、何れを此とし何れを彼とせん。（刀斧で斫れども開けず。）暖信は梅を破ばせて春は寒枝に到り、（返魂香を収得し。）涼颯は葉を脱して秋は潦水を澄ましむ。（来つて塗毒鼓を搗む。）

今冬は大雪でした。ちなみに、今回は雪ダルマをめぐる禪の機縁です。所は江西省仰山、時は唐末から宋初にかけて、三人の禅匠が登場する圧巻の一則です。なお、本則が短いので、宏智さんの「頌」を加えました。

仰山は北緯二八度ぐらいですから、日本では徳之島辺。ここで雪が降るのは稀なこと。もつとも仰山は高山ですから、冬に積雪のこともあったのでしょうか。南方の福州郊外には雪峰山もあるのですから。とまれ、仰山道場を



開いたマ
スターは
慧寂さん
（八四〇〜
九一六）。
この方は
「小釈迦」
と称され、

のちに本師の瀧山靈祐とともに、禅宗五家のうちの瀧仰宗という一派の開祖となっているほどの禅匠。この則はこの仰山道場が舞台です。他の登場者二名は雲門と雪竇。雲門宗の開祖雲門文偃（八六九〜九四九）は、『従容録』では「本則」の機縁がズバぬけて多い禅哲。さいごにお目見えの雪竇重顕（九八〇〜一〇五二）こそは「仰山指雪」の主役。宋初の人で雲門宗中興の祖であり、『碧巖集』の原作者としてあまりにも有名な禅匠。

さて、まず万松さんによる全体的な要旨〔示衆〕をみましょう。

氷と霜の色は同じだし、雪と月も光は一緒で分けられぬ。だが人間は清らかな悟りの心境に腰をすえた者も、悠々自適の漁父も、ともに凍死してしまふ。どうしたらそうならずに清らかさを真にわがもののできるかな？

こんなところ。「漁父を清損」とは、かの清廉潔白な屈原がかえって楚の国を追われて失命したように、悠々自適の漁父も同じ結末を迎えるというたとえ。つまりここでは、悟りの境地がいかにすばらしくとも、そこに安住するのみではダメ、という主旨ですね。

つぎに「本則」は、仰山が珍しい雪ダルマ

を指して、「いったい、これより白いものがあるかな？」その時はたれも答えられなかったのでしょうか。後にこれを聞いた雲門、「私とその時いたら、雪ダルマを蹴倒したんだが」と。それを聞いた雪竇は後に「雲門さんは蹴倒すことは知っているが、これを扶け起して活用することを知らん」と云った、と。



明代の仰山（『仰山乗』より）

ダルマの白さを禅の悟境にたとえて即物的な教示をした。これに対して雲門は、悟境を「これだ」という目に映るものになどたとえたら、人はかならずそれに執ってしまう。だからそんなものを消すために、雪ダルマを蹴倒すと云った。蹴倒された雪ダルマは、まもなく跡かたもなくなりますね。

でも、万松はコメントして、船の水の「かい出し」をこわしたら船はどうなるんだ、とこれを批判しています。さいごの雪竇は、やや後出しジャンケンのきらいもありますが、ワシは蹴倒されたら扶け起して自由に活用するゾ、と間接的ながら雲門の語を批判しています。

また、宏智の「頌」は長いですが、「明白」とは心中に何の曇りも汚れもない悟境のこと。そこに留まり満足してはダメ。そこから出て活動せよ。真の学道者は何物にも依存せず、しっかりと生死のしがらみに生きよ、との主旨。

たしかに、いくら坐禅しても明鏡止水に収まりかえってはいけませんね。ブツダは、道をえた弟子たちをインド各地に送り出し、布教に向わせました。ブツダ自身の言動を絶対とせず、自灯明のはたらきを重んじたからです。道元禅師も、坐禅による慈悲の心を養う教説を懇説されています。

私は昨臘から長く四大不調となり、どれほど多くの人々に支えられている身か、また大自然の力で生かされているかを痛感。坐禅をご縁にその恩恵を一人でも多くの人々にお返ししなければ、との思いに駆られています。

第三一回成道会

ご老師四大不調を推しての法要

平成二五年一二月八日、第三一回の成道会が開催されました。今回は三月に坐禅堂が完成したとあって、九時から坐禅堂で坐禅(二〇分の坐禅、一〇分の経行、三〇分の坐禅)を組み、その後、本堂での成道会となりました。



ただ、ご老師が四大不調とあって、御提唱、問答は行われず、やや寂しい会でした。問答は二〇回目の成道会から始まりましたが、行われなかったのは今回が初めてです。

法要はまず大黒様など女性一五名の梅花講員による詠讃歌で始まり、華麗な中にも荘厳な雰囲気盛り上げられました。その後、全員でご本尊を三拜。老師の拈香香語があり、全員で普同三拜して、般若心経を唱和しました。なお法要の前の坐禅では、ご老師の坐禅も最初だけで、法話が出来ない旨の短いお詫びのお言葉だけでした。かなりお疲れの様子で「出てこれないご病状なのに、ご無理をされているな」と感じられました。

法要の後、三〇年以上坐禅を続けてこられた徳山さんの表彰式が行われ、ご老師はこう挨拶なさいました。

「徳山さんは最古参の会員。実際は三〇年以上坐禅を組んでおられますが、二〇年に近く、奥様を亡くされ、数年、来られないことがあります。そこで、今回、かなり時間がたちましたが顕彰することに致しました」。

徳山さんにはご老師が「劫外春」と揮毫された額が贈呈されました。

成道会の後、席を移し点心となり、小畑代

表幹事が「ご老師が四大不調なので、みなさんで五観の偈を唱えましょう」と挨拶。松井、小山の両典座さんに牧野さんも加わり、心を込めて作られたお料理に舌鼓を打ちました。

食事を頂いた後、茶話会に移り、五十嵐年番幹事の「各自、成道会の感想を」との言葉で全員が感想を述べました。

「ご老師の病状が心配だ」との声が相次ぎ、「問答が出来なかったのは残念だった」との感想も多くの方から上がりました。

席上、徳山さんから次の様なお礼の言葉もありました。

「私は初回から出席しており、何回か休んでおりますが、三一回の成道会を皆様のおかげで無事終えることが出来ました。ありがとうございます。私事ですが、永年賞讃の額を頂き感謝しております。先ほど清水さんから『明日は分からない』という話がありました。歳なので体を鍛えるのはむずかしくなってきましたが、出来るだけ長く来たいと思っております。それには心と体を整える努力だけは出来ると思っており、頑張ってみたい。よろしく願います」。

その後、小畑代表幹事が「ご老師は出席なさらなかったが、カレンダーを御老師から頂

きました」との紹介があり、全員が頂き、例年通り、三町さんから三つの仏像の写真の寄贈がありました。人数が多いので抽選が行われ、牧野さん、小畑さんが見事当選。三人目は当選した人がいなかったため三町さんの指名で五十嵐さんに贈られました。

小畑さんから「三一年間参加しているが当たったのは初めて」との言葉があり、笑いを誘う一幕も。会は一気に盛り上がりました。

最後に五十嵐年番幹事が「問答は来年の成道会まで大切に取っておいて下さい」との閉会の辞があり和気藹々のうちに終了しました。

その後、小畑幹事が「ご老師に問答はどうなさいますかと聞いたところ、『氣力が無い。いい加減なことを言ってもダメなのでやめさせて頂く』とお答えがあった」と、内輪話が紹介されました。参加者は二八名でした。

談論風発の新年会

ご老師から三つの問題提起

龍泉院参禅会は、特別な場合を除いて、行事があるごとに宴会による「打ち上げ」は行われません。

そんな参禅会で、唯一の公式行事となつて



椎名老師と会員で鍋を囲んでのひととき

いる宴席が「新年会」です。平成二六年の「新年会」も恒例の「うどん市」で二月二日に行われました。

昨年末に体調を崩されていた椎名老師も回復途中でしたがご臨席され、楽しい一時を過ごしました。また、二〇キロ以上ある自宅から四時間以上かけて徒歩でやってきて、皆を仰天させている人もいました。

小畑代表幹事の開会の辞の後、ご老師のご挨拶があり、松井さんの音頭で乾杯。しばらく歓談した後、年番幹事の小山さんによる、御老師からのお年玉阿弥陀くじ抽選の当選者

の発表がありました。

一等の会津塗の文庫は小畑二郎さん、二等の葡萄の絵の入った湯呑みは添田さん、鈴木さん、佐藤さんに当たりました。

「鈴木さんが当たった茶碗だけ、葡萄の絵が赤いでしょう。これはご婦人用だから自分で使っちゃダメです！奥さんが使うのです。他の人は葡萄の絵が青いから紳士用です。どうぞ、ご自分でお使いください！」小山さんの名司会で、鈴木さんも思わず苦笑い。今年御老師がご挨拶の中で参禅会の宿題として次のような三つの問題提起をされました。

①坐禅堂が完成し、利用にあたってのルールもできあがった。しかし、ルールが厳格すぎ、最近足が遠のいてしまったという会員もいる。はたして坐禅堂のルールは厳しすぎるのか。

②ある参禅会員から、龍泉院の檀家さんを批判する意見があった。すなわち、参禅会では坐禅堂の建立に尽力し、作務なども行つて龍泉院に奉仕しているが檀家さんはあまり積極的にそのような奉仕をしていないように思える。私（椎名老師）としては、檀家さん方は法要ごとにお布施をあげてお寺をしつ



一等賞の会津塗 小畑二郎さん、おめでとうございます

り護持して下さっているし、大掛かりな山掃除も檀家さんが大勢積極的になさって下さっている。このような批判は的はずれだと思いが、同じ参禅会員としてはどう思うか。

③坐禅堂建立の理念は「自未得度先度他」であり、参禅会員だけではなくできるだけ多くの人にも使っていただきたい。団体の参禅歓迎などをPRしていったらよいと思うがどのような受け入れ体勢が考えられるだろうか。

この問題提起に対して、参加した会員は各自各様に意見を述べました。

①については、坐禅の本来のあり方からすると厳しいということはないという意見が大勢

でした。ただ、特に高齢の人はトイレが近い。帳が降りた後はもう内単から出入りはできなくなるので、外のトイレに行きたくても行けない。厳しいと感じるのはこのところではないか、という意見がありました。

②については、檀家さん方は龍泉院をしっかり護持してくれてありがたい。参禅会として何ら檀家さんを批判するようなことはないのでは。ということでも自然に一致しました。

③については職場などで興味を持って人がある場合は誘ってみよう、という声がありました。機会があればやってみたい人にとど働きかけるかがポイントになるだろう、という意見もありました。

以上は、新年会出席者からの主な意見です。新年会にご参加できなかった方でご意見や良いアイデアがあれば例会の茶話会などで発表していただければと思います。

新年会について

流山市 羽根石 弥佳

二〇一四年二月三日(日)に、参禅会の新年会が開催されました。私は二〇一三年一月からこの参禅会に参加させて頂いているので、全くの新参者です。そんな私でも、とて

も暖かく迎えて下さり、最初から緊張がほぐれてなごやかなムードで参加することができました。

聞くところによるとすでに四〇年目を迎えているという参禅会。その歴史の深さに驚きました。皆様それぞれあらゆる分野で活躍されてきた方々、また、現役でご活躍されている方々など様々ですが、共通している印象は皆様とても、探究心が旺盛だということ。私がこれまでに感銘を受けた三つの格言を思い出しました。

一つ目は、「明日死ぬかのように生きよ。永遠に生きるかのように学べ」ガンジー。

二つ目は、「知足」老子。

三つ目は、道元禅師のお言葉「光陰は矢よりも迅すみかなり、身命は露よりも脆し」

以前は、「光陰矢の如し」と思っていました。が、矢よりも速く過ぎさるとおっしゃった道元禅師のお言葉は、とても胸に刺さりました。

皆様、こういったこと全てを人生経験において、すでに実感されていらっしゃるのだなあと、わきあいあいと歓談されている皆さんを見ながら、そう感じ入っております。おだやかな表情の中に、とても熱いパッションの

ようなものを秘めている。とても、刺激になる大先輩の方々です。

ところで、ご老師がご挨拶の中で、三つ問題提起をなされました。内容は改めて記しませんが、主に参禅会の会員としての姿勢と考え方、そして、今後の坐禅堂の活用・展開について、改めて考えさせられるものだと認識いたしました。

当初は、近くに坐禅を指導して下さるところがあつた、と喜んでおりましたら、とても立派な坐禅堂があるので驚きました。もちろん、坐禅堂があるなしにかかわらず伺つたと思います、この坐禅堂を見た時は、皆様の真剣さが伝わってまいりました。

すでに参禅会におられる方々は、私も含めてもともと坐禅を求めておりましたので、坐禅堂があつてもなくても、寒くても暑くても上山されていたと思います。私を感じたという「真剣さ」というのは、坐禅をひとりでも多くの方に体験してもらいたい、と本気で思っているんだという「真剣さ」です。

立派な坐禅堂もさることながら、ご老師のお人柄と徳の深さ、そして、一丸となって坐禅堂の建立を実現させたという、参禅会の方々に魅力があると感じております。なんと

か、その良さも知っていたら、今後もっと仲間が増えるといいと思いますし、微力ながら、私もできることをお手伝いしたいと感じました。

さて、話は新年会に戻りますが、会も後半になり、皆さんお酒もかなり回ってきている様子でした。そして、各自のご挨拶になりましたが、こんなに酔っているにもかかわらず、最後にご老師の問題提起について、それぞれ考えを話しましょう、ということになりました。この誠実さには感嘆いたしました。それがまたどんなに酔っていても、皆様言っていることがとてももつともで、興味深い内容でした。

そして、率直な意見を交わし、違う意見もきちんと聞く態度にもびっくり。信頼関係も厚いのだなあと感じました。皆さん、本当にご老師を尊敬し、参禅会のことを大切にしようとしているのが、ひしひしと伝わりました。皆様とともに今後の参禅会について、新たな決意を持つて締めくくることができた、新年にふさわしいとても良い会でした。

ところで、皆様無事お帰りになりましたでしょうか。今後何卒宜しくお願い致します。

第三一回涅槃会

死ぬまで修行を怠るなど

二月一五日、朝まで記録的大雪が降るといふ悪天候の下、涅槃会がおごそかに行われました。

法要は午後二時、先導を鈴木さんが務め、ご老師が侍者松井さん、侍香山本さんを従えて入堂し、梅花講のご詠歌が始まりました。普同三拝の後、ご老師が拈香香語を唱え、その後、杉浦さんの挙経により、全員で『般若心経』、『舍利礼文』をお唱えしました。さらに舍利礼文を唱える中、梅花講員を先頭に順次、ご本尊に焼香を行いました。

『般若心経』を暗記している人は多いですが、『舍利礼文』のほうは暗記までしている人が少なく、殆どの人が経典を手にしてお唱えしていました。その後、再び普同三拝。涅槃会は莊嚴の中にも落ち着いた雰囲気です。

涅槃会が終わった後、ご老師から、以下の様なご法話がありました。

「お釈迦様は今からおよそ二六〇〇年前に八〇歳でお亡くなりになりました。お亡くな



二九九年前に制作された涅槃図

りになって完全な涅槃に入られたということ
で般涅槃といひます。そのお経が『大般涅槃
経』、サンスクリット語では『大パリニバー
ナ経』といひます。その『大パリニバーナ
経』によると、お釈迦様は涅槃に入る前に数々の
素晴らしい説法をなさいました。特に有名な
のが、「法燈明」「自燈明」の教えです。これ
は「人は法（＝真理）を抛り所にし、自己を
抛り所にせよ」ということです。

本当の最後の説法はおそらく、侍者のア

ナンダが聞いた、「全て変わっていく（＝諸
行無常）。死ぬまで修行を怠るな」という言
葉でした。きっとお釈迦様は命が尽き果てよ
うとする中での、息も絶え絶えの渾身の説法
であったと思います。物事はどんどん変わっ
ていくからこそ、日々、一生懸命修行するこ
とが大切なのです。本日は本当にありがとう
ございました。」

涅槃会の出席者は梅花講八名、参禅会九名
にご老師を加えた一九名でした。また、涅槃
会の前、前夜の大雪で埋まった参道の雪かき
という作務も行われました。

涅槃会の後、ご老師から「龍泉院の涅槃図
は二九九年前に描かれた柏市では最も古い涅槃
図である。来年は三〇〇年になるので、こ
れを記念して、なんらかの行事を行いたい」
との提案があり、参禅会が中心に今後、プラ
ンを練ることになりました。

托鉢修行に参加して

柏市 山下 有三

私は一二月七日、六五歳にして初めて托鉢
修行に参加させていただいた。柏駅東口の二
階コンコース、「そごう」寄りに、お坊さん三
人に挟まれるように立った。龍泉院参禅会か

ら九名の仲間が参加したが、皆さんは東口出
口付近に陣取っていた。長全寺さんから駅ま
で来る途中に最後の列を歩いていた私は、リー
ダー格のお坊さんから「君はここに我々と一
緒に立つように」と云われて、この位置となっ
た。私は「歳末助け合い 曹洞宗」と書かれ
た幟をもって、道行く人に曹洞宗のお坊さん
であることを示す役割を担ったのだ。

お坊さん達は募金箱を胸に、鈴を鳴らしな
がら、『般若心経』やほかのお経を唱えて、道
行く人々の関心を呼ぼうと頑張っておられる。

さて、私はどうやって関心を引こうか。『般
若心経』であれば私も暗唱できる。しかし、
本職のお坊さん達がお経を唱えている横で、
私が同じように『般若心経』を唱えても何の
関心をひくことにもならない。

参禅会のみんなはどうしているかと思っ
てそちらを見ても遠すぎて何をしているか見え
ない。そこで思い付いたのが「歳末助け合い
に皆さまのご協力、ご支援をお願いします」
と大きく叫ぶこと。早速に、大きく叫ぶ積り
が、声が震え、小さく叫ぶのが精いっぱい。
それでも勇気を持って何回か繰り返し返してい
ると私の声も徐々に坊さん達のお経、鈴にな
じむようになってきていた。



財法二施功德無量 柏駅前で行乞

こうして大きく声がけができるようになってから、気が付くと、道行く人たちは我々の行動に興味を示す人がかなりの数に上ってきてはいるが、誰も募金を行うにはいたらず、見過ごしていくだけ。こうして一〇分、五分と経っていくなかで、漸く一人の古老の女性が、迷わず私の右隣のお坊さんに向かってきて、拝をされた後、募金箱にコンと募金。また、しばらくすると、同じような年恰好の

女性が今度はお坊さんと私の中間、一・五メートルほどのところに立ち止まって、お坊さんと私を交互に見た後、すっとお坊さんに近寄り、またコン、コンとコインの落ちる音。するとお坊さんがお礼の挨拶に続いて、お経を声大きく行くと、その古老の女性がお坊さんを恭しく拜んで立ち去った。

(私たちが緒子のように首にかけている募金箱は、ティッシュボックスより少し大き目で、厚手の紙か段ボールで出来ていて、箱の上辺をくり抜き、箱の側面に募金箱と書いた簡単なもの。募金する人達がコインを入れると二〇センチほど落ちて、箱の底に着くと、コインの落下音コンが募金箱の中で共鳴し、結構な音になるのに驚かされた)

お坊さんたちの募金箱には少しずつだが募金が入っていく。しかし、私の募金箱には、募金活動を始める前に、呼び水の積りで自分が入れた千円だけで時間がたつて行く。街角に立つ前に怖れていたことが現実になったかと徐々に怖れの気持ちが強まると同時に、参禅会でのご老師のお言葉、「何事にも工夫をすることが大切」を思い出し、どうすれば募金をしていただくことが出来るか考えた。「歳末助け合いに皆様のご協力、ご支援をお願い

します」の呼掛けに変化をつけることを思いつき実行するが効果なし。

まだ、かなり距離のある時点から一人に定め、私としては、最大の気持ちを込めて、呼掛けを行うが駄目。ご家族が近づいて来るのを見て、私としては満面の笑みを浮かべて、お子さんに呼掛けを行うが素通り。このようにして私は表面何もないかのように取り繕うが心のなかでは「何故一人も募金をしてくれないのか」と焦りを募らせながら、呼掛けを続けている中に、年配の女性がお坊さんの募金箱にコン、コンと入れた後、私にも近寄ってきて「寒い中、ご苦労様です。僅かですが」と私の募金箱にも、コンと落とす。私は思わず大きな声で心から「ありがとうございます」と感謝していました。

その後も様子は変わらず、多くの人が通り過ぎる中で思い出したように募金箱に落ちるコンと音を聞く中で、また、あることに気付いた。募金をしようと私たちに近づいてくる人は、心の中でどの募金箱にしようかと思いつながら近づいて来る。そして、同じ募金をするのなら「ご利益」がありそうなお坊さんの募金箱に入れようと決心し、近づいてきて募金箱に入れる。そして偶々未だコインが手元

に残っていると私の募金箱にもコンと落とす
てくれるのだ。

私は漸く理解した。この修行は一人で行っ
ているのではない。お坊さん達の中に入らせ
ていただいて参禅会の全員で修行させていた
だいていることを。

合掌

追記・私は龍泉寺参禅会には昨年四月から
参加させていただいておりますが、坐禅その
ものを始めて六年が経ち、心の隅に自己満足
がありました。そこに、一月の月例参禅会
の提唱の時間にご老師から「自己満足の坐禅」
になっていないか、「利他の精神」の大切さ
を箴として頂き、心に衝撃が走りました。続
く茶礼の時間にご老師から「来る一二月七日
の托鉢修行のお誘い」をいただき、迷わず幹
事・杉浦さんに参加したい旨申し上げました。

中国祖庭巡拝の旅

柏市 五十嵐 嗣郎

昨年の一〇月二六日〜十一月二日にか
けて、駒澤大学大洪山慈恩寺落成法要参観団の
一員として、中国祖庭巡拝の旅に行つて来ま
した。参観団は総勢一三名で団長は駒澤大学
仏教学部の石井修道教授です。旅の主要目的
は湖北省随州にある大洪山報恩寺の落成法要

に参列することです。

大洪山は随州市から西南へ一二〇里の所に
あり、宋代に中国曹洞宗発展の基礎を築いた
芙蓉道楷禅師や丹霞子淳禅師などが住持され
たところでした。日本曹洞宗のルーツともなる
ところで、最盛期には千人もの修行僧がいた
そうです。海拔千mの切り立った山頂に湧水
を発見しことから、四万五千㎡もの敷地を切
り開いて慈恩寺の大伽藍が建立され、境内に
は大小二八もの伽藍が立ち並び、一番奥には
全てが銅で造られた光り輝く金頂が建てられ
ていました。大洪山慈恩寺の再建にあたって
は、中国仏教協会副会長で深圳弘法寺の方丈



中国祖庭巡拝図

である印順法師が、大変なご尽力を払われた
そうです。

落慶法要の当日は好天に恵まれ僧俗千人ほ
どが参列していました。石井団長先生は印順
法師とともに、四導師の一人としてお勤めに
なれました。我々駒澤大学参観団にも前か
ら三列目の招待席が用意され、VIP待遇を
受けて式に臨みました。

落慶法要の翌朝、印順法師が我々の宿泊
していたホテルにわざわざ出向いて来られ、
我々のために朝食をご馳走してくださいまし
た。その席には地元共産党書記も印順法師
に敬意を払って同席するなど、思わぬ形で日
中交流が始まりました。

食事の前に、団員一人一人が今回の参観の
感想などを印順法師へ述べましたが、私は
「この二〇年間で一〇回ほど中国の仏蹟参観
の旅に来ているが、毎回寺院が次々と復興さ
れ、その規模の大きさには圧倒されるものが
ある。」と申し上げました。すると印順法師
は「寺院の建設より大切なのは人の心の建設
です。日本と交流を深め修行僧を駒澤大学に
送りたい。」と仰られました。

また、石井団長先生は日本曹洞宗千葉省三
教学部長からの親書を印順法師に手渡された



印順法師（最前列左から二人目）と駒澤大学参観団

後、「私は四〇年以上前、宋代曹洞宗の研究を大洪山の碑文から始めました。駒澤大学を退職する今年、大洪山の法要に導師として随喜できたことは、一生の思い出です。」と語られました。印順法師は石井先生の絡子の裏に「空是什麼」と書かれてあるのをご覧になられて、即座に「無佛無衆生」と揮毫されました。

因みに落慶法要の記念品として、印順法師が竹簡に書かれた『大慈恩寺賦』をいただき

ましたが、その中には「曹洞法脉臨濟轉、縁落縁起到法遠。投子義青承法幢、傳法報恩興洪山。信物交給道楷手、芙蓉靈峰成大千。丹霞子淳到如浄、法至道元日本宣。駒澤學府曹洞情、來年拜祖續新篇。」と記されており、印順法師の「修行者を駒澤大学に送りたい」と言われたのは、単なる社交辞令ではないことがわかりました。

朝食後、大洪山を後にして石井先生の研究の始まりと言われた碑文を見学し、近くにある洪山寺と言う尼僧寺院を訪れました。さらにバスで約一〇〇キロ離れた京山県にある大陽警玄禪師が住持された大陽寺跡に向かいました。中国の旅行社では場所がわからないため、地元の村長さんや以前駒澤大学が訪れたことを知っていた方々が、村の入口から案内してくれました。大陽寺跡には全く伽藍はなく、田圃の畦道に石碑がポツンと二つ立っているだけでした。

翌日は湖北省黄梅県にある四祖寺と五祖寺を参観しました。両寺院とも平成一六年に龍泉院参禅会でも参観しましたが、伽藍はその時よりも立派になっていました。四祖寺では最近、「衆生は全て平等」をスローガンとした「生活禅」の提唱で人々から大きな支持を

得られていた浄慧法師が、化をふるっておられました。石井先生は昨年三月に大洪山の下見に訪れた際、浄慧法師に面会されましたが、その一ヶ月後に遷化されたとのこと。その縁もあつて我々に法師の美しい舍利を見せて下さいました。

翌日は安徽省の潜山の三祖寺、続いて桐城の投子山に参拝、その後浮山を訪れました。ここは大陽警玄禪師から密嘱を受けた浮山法遠が、衣履を投子義青禪師に代付したところから、法遠が義青に伝法したとされる「会聖窟」という洞窟は、当時の面影を留めており、ここから投子義青―芙蓉道楷―丹霞子淳を経て、曹洞禅は大いに発展したかと思うと感無量のものがありました。

次に池州の南泉寺へ向かいました。ここも寺跡がわからないので、地元の村長さんに案内してもらいました。現在伽藍は全くありませんが、新伽藍建設が計画されており、そのため近くの九華山から若い住職が派遣されていきました。彼も「寺の建設だけでなく心に禅を建設したい」と語っていました。

翌日は江蘇省に入り南京の長蘆寺跡地を訪れました。インドから仏教を伝えるに來られた達磨大師が梁の武帝との機縁が叶わず、長江

の河原に生えている長い蘆を一枝折って、蘆の葉に身を託して対岸に渡り、この長蘆寺で一夜の宿を借りました。そしてさらに北へ向かい、高山少林寺で面壁九年の坐禅に入られたと言われています。このように長蘆寺は「蘆葉達磨」の故事発祥の地であり、開山は菩提達磨大師を戴く名刹です。

後代には『禪苑清規』を撰述した長蘆宗頤禪師や眞歇清了禪師、宏智正覚禪師などが住持しています。長蘆寺の跡地は現在学校の敷地となっており、しかも化学工業団地の真只中にあります。化学プラントから排出される排気ガスなどによる大気汚染がひどいため、少し離れた公園に新しく大雄宝殿が建立されています。

今回は代付に関わられたお祖師様方ゆかりの仏跡と、その後曹洞宗が興隆した時のお祖師様方ゆかりの仏跡を参観して来ました。それがとりもなおさず日本曹洞宗のルーツとなる仏蹟を巡る旅でもありました。今回の旅では参観した各寺院で『般若心経』を一巻あげて参拝しましたので、どの寺院でも大歓迎を受けました。日中関係が難しい折ですが、仏教の交流を通じて両国の友好促進に少しでも貢献できたのではないかと存じます。

正常な日中関係が早く築かれんことを期待しております。

作務から見える風景

松戸市 河本 健治

作務について何か書いてほしいとの原稿依頼に「はて」と困ってしまいました。

そもそも作務を特別意識することもなく、仏道に感ずることでもなく、ただ自分に何か出来ることがあればとの思いでした。

第二土曜の作務日ですが、なんとか続けられている所を省みると、参禅会員になつての御縁、入山当時の経緯が思い出されます。

松戸市に移り住み、長くなりますが、この近郷には自然も多く里山が静かに点在する様子に嬉しく思つたものです。

龍泉院に初めて立ち寄った時、何ともいえぬ清々しく暖かい気持を感じました。

周囲を森に抱かれ、行き届いたお庭に鳥のさえずり、素朴にして凜とした山寺に時を忘れてしまいました。時々お参りと称して境内を散策していた折、昨年はまだ肌寒い三月、大悲殿の前に人の出入りが多く、こんな朝も早い時間帯になにごとかと思つていた時「参禅初参加者ですか、どうぞ、どうぞ」と優しく

く声をかけられました。当寺院で肅肅と参禅会として継続されていることもしらず、以前から漠然として一度坐禅を体験してみたいとの思いもあつて、何の準備もなく受け入れていました。

厳肅な堂内で坐禅されている姿に圧倒され、教わるまま端坐してみたものの、足が痛い時間は長く、あげくに立てない有り様です。大悲殿にて、老師の講義も上の空、末席にて下を向いての初体験となりました。

無理だったとの思いでしたが、日が経つにつれ、あの静寂の内で、「只只」坐られている様相が頭から離れず、いつしか意を決して次の土曜作務日に再度来山したのです。

その日は雨、静かな境内に人影もなく、次第に本降りとなり「こんな日に作務などある訳もなく、少し考えれば解るもの」と、本堂の前で一炷の反省坐禅となった作務デビューでした。

こんな情けない有り様でしたが、今までこれといった宗教観もなく、仏心に思い至ることもおぼつかず、ただ若い頃より何故か「禅」の文言が頭上高く輝いており、敷居の高い存在でもあったのです。この不思議な響きの言葉をも、もしかして手元に引き寄せられないか、

その思いに到ったのです。今は会員として、作務においても初心者、先輩に倣なまい真似るだけですが、それでも自分なりに作務から見える風景を楽しんでもいます。

春花満開の頃、草取りに精を出し、雑草の意外な生命力にてこずり、虫が驚いて右往左往、初めて使う刈込機での小枝剪定で延長コードの切断失策、五葉松に恐る恐る鎌を入れたの初体験、真夏の頃、汗も気にせず一輪台車で境内をヨロヨロと、いつも時を同じくして「お茶にしませんか」と老師みずから御用意して下さる有り難い一服、そして皆さんと頂く至福の一時、ただ合掌あるのみです。いつもいつも坐禅堂を仰ぎ見ながら、いつしか紫陽花をバツサリと坊主にした頃、紅葉を落ち葉として集め、古木と共にする焚き火、その炎の先を感慨深く見つめる思い、いつの時も、常に竹林の静寂な空間と素朴な時間がここにあります。

龍泉院にも早い初霜が地表を押し上げる自然の技に脱帽、目立たぬ龍の髭、株分けしての植栽が、しっかりと雲堂を飾っていました。坐禅堂完成以降、第二土曜日が自由参禅日でもあり、今は坐禅後に境内清掃をしておりません。

こんな風景を体で体験しての作務ですが、「する」のではなく「させて頂く」所から見ると別の風景が現れる様にも思います。

今後とも時間の許すかぎり精進したいと思っております。

合掌

修行はいつまで

続けなければならぬか

市川市 逢坂 國一

仏陀世尊の成道を讃える第三一回の成道会は、参加者皆さんの支援により昨年一二月八日に無事円成した。いつも貢献度の少ない私は、世話役の皆さんに感謝しつつ参加しました。

成道会は、自己の修行の進捗状況を知る上でよい機会であり、また、問答を通じて日頃の疑問を椎名ご老師に解説してもらおう楽しむ場でもある。

入門したての私の質問「仏道の修行は、死ぬまで続くのでしょうか」に対し、椎名ご老師の回答は、「死ぬまでは勿論、死んでからも続けることになる」でありました。

科学技術から見て「死後の来世の存在」には否定的で、また、参禅に目標があった当時の私には、なんとも納得がいかず、これでは

目標達成はいつになるか不安でした。

申すまでもなく、科学技術の進歩は著しく、一三〇億光年先の星が観測でき、宇宙、地球、人類などの誕生および歴史がほぼ明らかになってきました。また、物質を構成する素粒子についても、電子や中間子よりもさらに小さい素粒子(クォーク、レプトンなど)の発見もありました。どこにも「来世の存在」を証明するデータは見つかりません。また、私の「参禅の目標」とは、一般の人と変わりなく、ある種の悟りを得て「如何なることにも冷静に対処する精神力を養う」です。特に、いざれ訪れる「死」にどう対処するか、確りした死生観を持つことでした。

一〇年近く参禅を続け、在家得度をえて、道元禅師はじめ空海、親鸞などの仏教の大家の思想に接して、今は、初期の考えを少し変えなければと思っています。宗教の世界は、物質の世界とは異なり、心の問題を扱っているものであり、客観性は必要ないのでしよう。人は、本来、仏性を有していると考えれば、各個人がそこに気がついたときに「悟りをえた」ことになる。また、生死の問題については、多くの宗教の大家は、「死」は「生」の一部として捉え、その連続の中で、現世での

努力、確りした生き方を求めています。

道元禅師の思想を伝える映画『禅ZEN』の中で、先師の如浄禅師の言葉として、「悟りが無限である以上、修行もまた無限である」「悟りと修行の連環は果てしなく続くのだ」また、「大悟したことすらも忘れて修行せよ」と述べていた。

修行イコール坐禅と置き換えて、論理的表現でいえば、今すでに悟りとは距離のある未熟な私の学道は、いつまでも「無限の悟り」とは距離が残り、修行では永久に縮まらないことになる。その解釈でよいのか？ 映画の中では、道元禅師は、坐禅で大悟したようにみえたが正しいか？ 今年の成道会には、是非、椎名ご老師に聞いてみたい。

雲堂寄進者芳名の揮毫

柏市 牧野 洋子

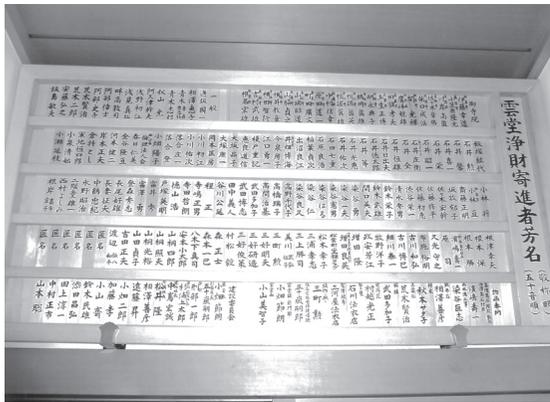
編集部より依頼がありましたので、ご報告させていただきます。

小畑さん、杉浦さんより浄財寄進者名を木札に書くことを依頼されたとき、正直、困ったなと思いました。というのも、私はまだまだ未熟者で、人様の名前をきちんと書くほど難しいものはないと常日頃思っていたからで

す。さりながら、お役にたてる実践の修行と
思い、細字を得意とする坂牧郁子さんにも分
担をお願いし、謹んで揮毫させて頂くことに
しました。

杉浦さん作成の配置図に従って、五段のうち一段と五段を坂牧さんをお願いし、私は、二、三、四段を受け持つことにしました。それぞれ何枚か書いてみて打ち合わせ。坂牧さんは、きりつとした細字、私は太く大きすぎ。互いに歩み寄って、大きさ、太さ、間隔等を統一しました。

「木簡墨」という木札用の濃い墨汁を使い



坐禅堂に掲げられた浄財寄進芳名者の額

ましたが、濃すぎると掠れ、薄めると滲み、墨の濃さに少々苦労しました。

猛暑の夏、紙に何度も練習した後、一人一人の寄進者に合掌し、限られた木札に一気に成に筆を運び、何とか仕上げた次第です。

坐禅堂に掲げられた工匠堂さん造の枠に、杉浦さんに一枚ずつ嵌めて頂き、「一人の人が書いたみたいだね」と言われてホッと胸をなでおろし、浄財をお寄せ下さった方々に改めて手を合わせました。合掌

肉眼と仏眼

我孫子市 清水 秀男

「肉眼（にくげん）は他の非が見える。仏眼（ぶつげん）は自己の非に目覚める。」

これは、浄土真宗高田派の高僧川瀬和敬和上の味わい深い言葉です。私なりに味わってみたいと思います。肉眼とは、煩惱多き凡夫の眼。我々は、自己中心的な狭い視野、浅薄な知恵で物事を捉え、それを絶対的に正しい判断とし、それに執着し、そこから抜けきることが出来ません。

自分中心の勝手なモノサシ（分別）を持ち、それに囚われ、しばられ、苦悩し、自縄自縛し疲れ果てているのが現状です。そして、そ

の眼は、自分自身の内側ではなく、常に自分以外の外側の他者に向いています。即ち、自分の「ものさし」が正しいとし、常にその「ものさし」で他者と比較しています。従って他者の非はよく見えます。

しかし、他者に眼が向き、自分の「ものさし」が常に正しいと思っているが故に、自分の非には気づかないのではないのでしょうか。「人の背中をよく見えるが、自分の背中は見えない」とは、このことを表しているのではないのでしょうか。

しかし、自分のモノサシは果たして正しいのでしょうか。自分の非に目覚めるためにはどうしたら良いのでしょうか。もう一度、原点に帰って見直してみる必要があります。それには、まず自分の自我で凝り固まった「ものさし」(分別)への執着を捨てなければなりません。

自分が正しいと思っている「価値基準」「固定観念」「とらわれ」「色眼鏡」を取り払い、一度、心を無にして、リセットする必要があります。悲の光に何度も何度も照らされ、岩盤の様に堅い自我を溶かして貫かなければなりません。

日本を代表する禅尼、青山俊董老師は、自我を溶かす修行の重要性を次の様に言われています。

「仏の教えという光に照らされ、慈悲というぬくもりにつつまれることで「私が、私が」という「我」の水を、水に溶かす修行が、修行の眼目」である。そして、「凡夫のものさしで生きるのではなく、仏のものさしで生きる」ことの大切さを強調されています。

「私が、私が」という「我」が水に溶けた状態、それが無我であり、無我の眼が仏眼であり、その仏眼によって、初めて自己の非に目覚めさせて頂くことが出来るということでしょうか。

そして、自己の非に一度目覚めればよいということではありません。目覚め↓感謝と懺悔↓修正実践のサイクルを何度も何度も繰り返し、回光返照しながら相続し続け、自分を深めていくことの大切さを、川瀬和敬和上は示しておられるのではないかと深く味わっています。

無我の仏眼が開くには、禅宗は只管坐禅によって目覚めさせて頂きますが、浄土真宗の場合は、徹底した仏法聴聞と言われています。中国浄土教の大成者である善導大師は『観無

量寿経疏』の中で、「経教はこれを喩うるに鏡の如し(仏の教えを頂くことを喩えてみれば、丁度自分の姿を写し出す鏡のようなものである)」と教示されています。仏の教えを何度も何度も虚心坦懐になつて頂く(聴聞することによって、初めて仏の教えの鏡に写る煩惱具足のおぞましい自分自身に目覚め、仏眼が開け、その目覚めに感謝し、懺悔し、自分の生き方の軌道修正を繰り返していくことが出来ることを示した教えと言えるのではないかと思います。

川瀬和敬和上の厳しくも、慈愛に満ちた教えを胸に刻み、一日一日を丁寧に大切に歩み続けて行きたいと心を新たにしています。

合掌

震災の歌を書にして

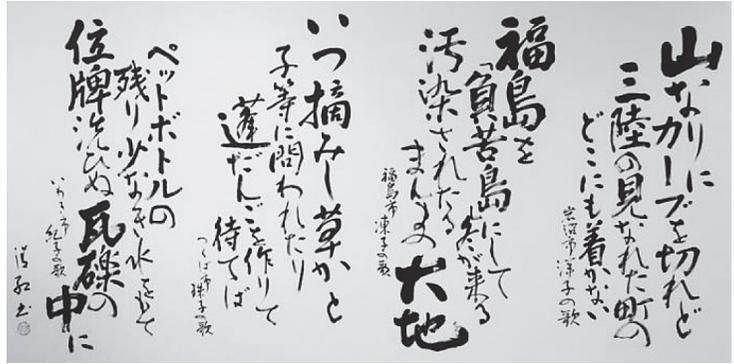
柏市 牧野 洋子

三度目の三・一一が巡ってくる。

平成二三年三月一日のあと、誰しも少なからず考えたのではないだろうか。自分に何が出来るだろうか。

平成二四年一月、書道展の出品表提出のメ
切が迫っていた。

書が文字や言葉を書くものであるならば、



震災の歌を書にされた作品

今、何を書いたらいいのか、ずっと悩んでいた。そんなとき、朝日新聞の「朝日歌壇賞」の歌が目止まった。毎週載る「朝日歌壇」の中から、四人の選者が一首ずつ選んだ、平成二三年の年間賞の歌である。折しも、四首とも震災の歌だった。胸に込みあげるものがあり、これらの歌を書いて多くの人に届けたいという想いに突き

動かされた。

書作に当たって、朝日新聞を通して四人の作者に手紙を送り、書作品にすることへの快諾を得た。書技の未熟さ拙さを顧みず、ただ心をこめて臨んだ。

県民プラザの展覧会場で、作品の前でいろいろな人と出会った。知り合いが被災したと話す人も何人もいた。親や親戚の人を亡くした書友もいた。作品の前に長く佇んでいる人に声をかけると、仮設住宅にいる人に必要なものを訊いて送り続けているという。また、この作品を見るために何度も足を運んでくれた人がいたと書友にきいて、言葉の力というものをも改めて思った。

展覧会終了後、四人の作者に礼状と写真をお送りすると、温かく身に余る感想が届いた。福島の方からは、手作りの和綴じの歌集が届き、岩沼市の方からは、合同歌集『東日本大震災の歌』が送られてきた。四百頁に及ぶ歌を私はひたすら読み続けた。

- * どんなにか冷たかろうに三月の津波に 逝きし万の命よ
- * 夫は逝き家は失せたりさわさわと胸に 寄り来る老いのさみしさ
- * とめどなき涙流れぬ避難所に母の名を

呼ぶ幼な児見れば

* 帰らざる子の声がする今日もまた瓦礫のなかに立つ人のいる

* ローンにて建てたる実家は破壊され当主の甥は遺体で見つかる

友人のOさんは、福島から柏へ避難してきた人を支援する「疎開支援の会」で活動している。昨年、会のバス旅行の折、彼女は私の書の写真を皆さんに見せて、何回も読まされたと報告してくれた。

原発事故の避難者約一四万人。同じ日本で、さまざまな思いの中で、人々は暮らしている。願わくは、此の功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に佛道を成ぜんことを。

合掌

(小畑さんのお勧めで、私の書活動の一端を書かせていただきました)

◆◆会員便り◆◆

● 昨年末にご老師が体調を崩され、一二月の例会で病身を推しての渾身の口宣には会員一同感銘を受けました。ご老師は『参同契』の最後の一節によりご提唱されました。「謹白参玄人 光陰莫虚度(謹んで参玄の人にもうす、光陰虚しく度ることなかれ。)」

時を大切に、大切にお使いなさい。ひたむきに歩み続ける裡にも時には立ち止まって休み、時には振り返って省みる事も大切です。

沼南雑記

【定例参禅会・年間行事】

(一)内は座談の司会者
平成二五年

● 九月二三日 二三名
(登森 秀志氏)

● 一〇月二七日 三三名
(岡本 匡房氏)

● 十一月二四日 三三名
(春日 仁美氏)

● 十二月 七日 一〇名
歳末助け合い托鉢参加

● 二月 八日 三二名
成道会

● 二月二二日 三〇名
(永野 昭治氏)

九月二四日(九名)、
一〇月二日(一名)
十一月九日(八名)
十二月四日(五名)
一月一日(四名)

【奉仕作務】
九月 六日(七名)、一四日(九名)、
二〇日(三名)

一〇月四日(四名)、二二日(一名)、
一八日(三名)

十一月 一日(四名)、九日(八名)、
一五日(三名)

十二月 六日(三名)、一四日(五名)、
二一日(三名)、二五日(三名)、
三一日(一名)

一月二〇日(三名)、二一日(四名)、
一七日(三名)

二月 七日(三名)、二二日(二名)、
一月一日(一名)

【坐禅堂燻蒸】
一二月一日(一名)

▼新しい編集部になりました。

【明珠】は皆様の参禅への感興や
近況を自由に掲載する「梁山泊」
のような紙面にしたいと思いま
す。宜しく願います。(智聰)

▼「新参者の私がなぜ?」。編集
委員を頼まれた時の率直な感じ
です。頼まれたのに断っては男が
腐る。「自未得度先度他」の精神に
沿って、老骨にむち打ってがんば
りたいと思います。ご協力のほど、
よろしく願います。(岡本)

龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、定例参禅会

・日時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散

・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順
(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・講義 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

・座談 自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

・日時 毎月第二土曜九時から正午まで

・坐禅 九時から一時まで(入退堂自由)

・作務 一時から正午まで掃除等

※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一夜接心 本年は六月七、八日、一泊し七炷の坐禅と提唱等

一、成道会 本年は二月七日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事 涅槃会(二月一五日)、花祭り(四月八日)、施食会
(八月一六日)手伝い、歳末煤払い(一二月例会後)

一、作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に掃除等

【会報誌】

一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)

一、『口宣』(年一回)

のバックナンバーがご覧になれます

【自由参禅】

幹事 小畑 節朗氏
小山 齋氏
石原 良浩氏

【自由参禅】

● 発行/天徳山龍泉院 千葉県柏市泉81

● 印刷/東港出版印刷株式会社 目黒区中目黒1-8-8

● 電話/04(7191)1609

● FAX/03(5724)7302